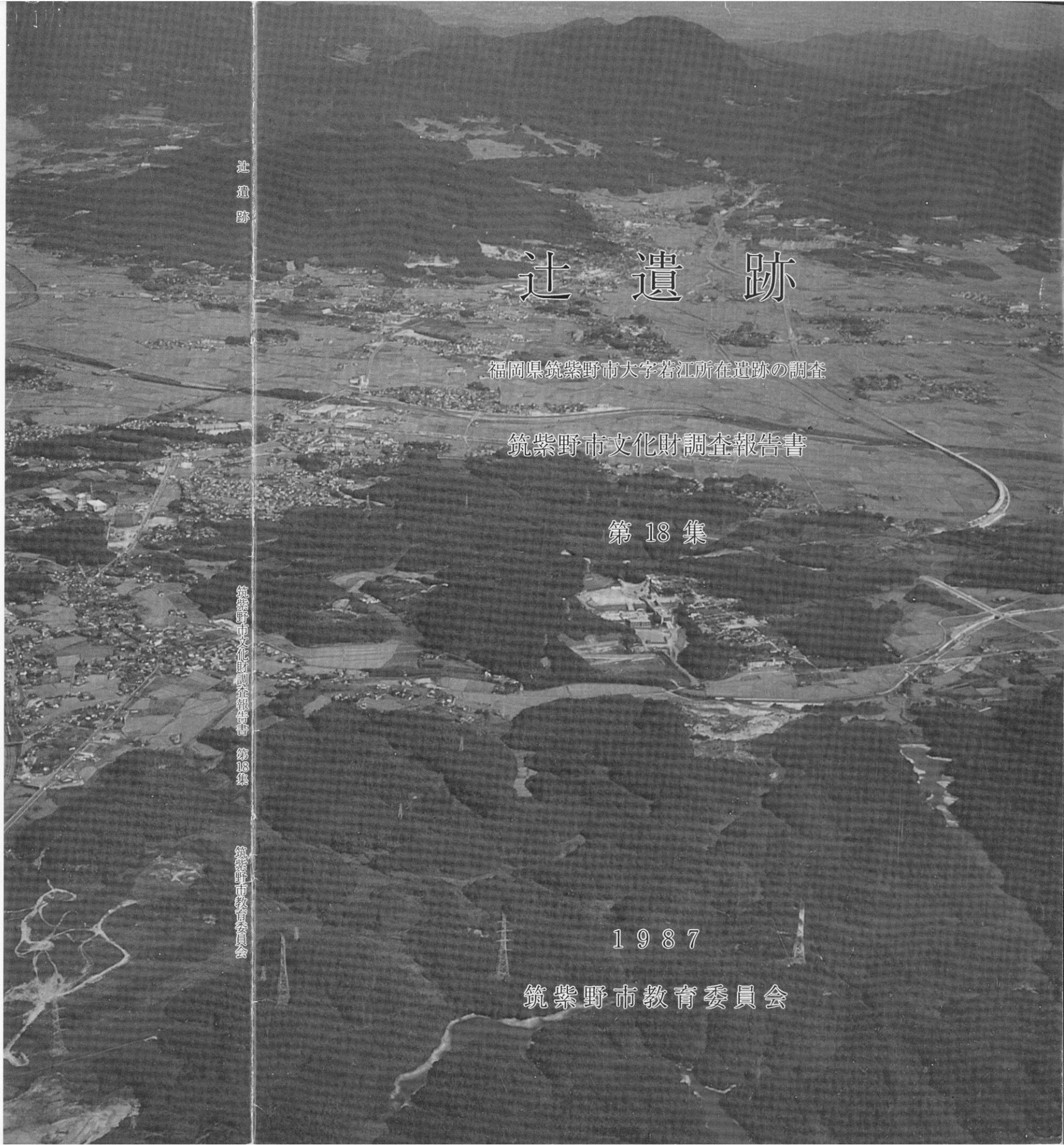
辻　遺　跡

筑紫野市文化財調査報告書
第 18 集

発　行　筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印　刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町１番１号



辻遺跡

筑紫野市文化財調査報告書　第18集

筑紫野市教育委員会

辻　遺　跡

福岡県筑紫野市大字若江所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 18 集

1987

筑紫野市教育委員会

序

当市は数多くの貴重な遺跡が平野部、山間部を問わず見られ、単に一地方史にとどまらない多くの問題を抱えた地域であります。

今回報告する辻遺跡は九州電力株式会社220kv（一部500kv設計）送電線「西福岡線」の鉄塔建設のための約95m^{2}を発掘した調査結果で、土壙一基（大きな穴）や下層から弥生時代、上層から古墳時代の土器が出土しました。

ここにその調査記録を公にし文化財保護の責務を新たにすると共に、今後とも文化財の保護に御理解、御協力を賜わりたいと念ずる次第でございます。

昭和62年３月31日

筑紫野市教育委員会
教育長　松田　康男

例　言

１、本書は、福岡県筑紫野市大字若江304番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
２、調査は、九州電力株式会社の委託を受けて、筑紫野市教育委員会が実施した。
３、現場での実測および写真撮影は、山野洋一、小林康弘の協力を得、奥村俊久が行なった。
４、遺物実測、写真は奥村が行ない、整図は鶴見加代子の協力を得た。
５、本書の執筆、編集は奥村があたった。

目　次

頁
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　位置と環境……1
Ⅲ　調査の内容……3
Ⅳ　まとめ……6

Ⅰ　調査に至る経過

昭和59年５月29日付けで、九州電力株式会社福岡支店より、筑紫野市教育委員会に220kv（一部500kv設計）西福岡線新設に伴う埋蔵文化財調査の依頼がなされた。これを受けて市教育委員会では、市内の全線に渡り鉄塔建設予定地の踏査を行ない、埋蔵文化財が包蔵されている可能性がある山家地区３ケ所、筑紫地区４ケ所を選出した。さらにこの７ケ所について試掘調査を実施する事となり、後者については昭和61年６月18日から26日まで試掘調査を実施した。この結果、うち１基が埋蔵文化財を包蔵する事が明らかとなり、市教育委員会は昭和61年９月26日付けで遺跡発見の通知を行なった。九州電力㈱福岡支店からは埋蔵文化財発掘の届出があり、双方の協議の結果、筑紫野市教育委員会が発掘調査を受託する事で合意し、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結した。発掘調査は昭和61年９月26日より開始した。

調査組織は下記のとおりである。

総括	筑紫野市教育委員会			教育長	松田康男
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課		課長	山村　茂
		社会教育課	文化財係	係長	山野洋一
			文化財係	主事	奥村俊久
調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財係	主事	奥村俊久

Ⅱ　位置と環境

本遺跡は筑紫野市大字若江304番地に所在する。

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ真中に位置し、筑前国の南端に当る。市の西には背振山塊、北東には三郡山塊が迫り、その間に狭長な筑紫野の平野がある。平野部は北西に福岡平野、南に筑紫平野を望む。市内の北西には鷺田川があり、御笠川と合流して博多湾に注ぐ。

東には筑紫平野北部を潤し、筑後川と合流し、有明海に注ぐ宝満川がある。筑紫野の狭長な平野部から筑紫平野へ広がる宝満川中流域西部の低丘陵地帯は、以前から遺跡分布調査によって大遺跡が存在する可能性が指摘されていた。この地域は昭和44年から実施された津古内畑遺跡の発掘調査以後は、発掘は行なわれていなかったが、土地区画整理事業により昭和57年から筑紫野市教育委員会が発掘調査を進行中であり、予想どおり数多くの埋蔵文化財が確認されている。また、国道200号線バイパスもこの地をとおり、天神遺跡・橋詰遺跡・平原遺跡・池の上遺跡・平原古墳群の調査がなされている。

第１図　辻遺跡周辺遺跡分布地図

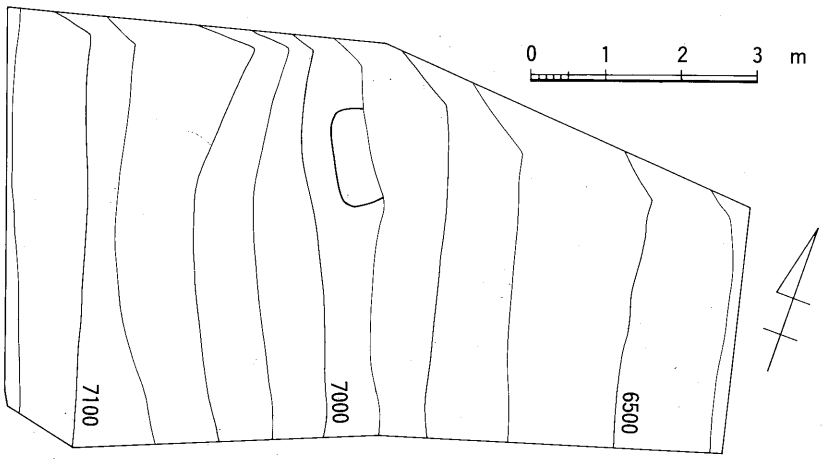
1 前畑遺跡　2 天神山裏山遺跡　3 隈古墳　4 上屋敷古墳　**5 辻遺跡**　6 池の上遺跡
7 平原遺跡（第５地点東地区）　8 橋詰遺跡（第４地点）　9 平原遺跡（第３地点）
10 橋詰遺跡（第３地点）　11 天神遺跡（第１地点）　12 椰野第１号墳～３号墳
13 大振山第１号墳～４号墳　14 五郎山古墳　15 津古内畑遺跡

Ⅲ　調査の内容

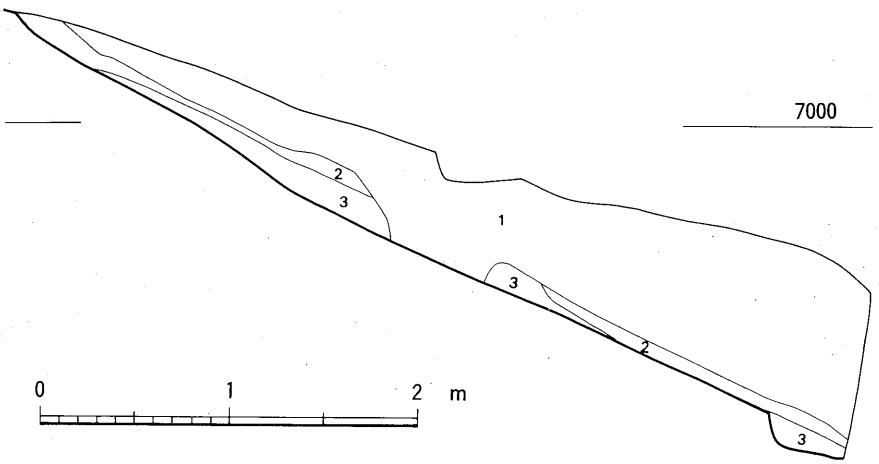
遺構

検出されたのは土壙１基のみである。土壙は、北側へ開く谷の最も奥まった尾根頂部近くに作られる。頂部では甕棺が50基余り調査され、頂部から東へ延びる尾根を150mほど進むと、甕棺約300基。さらに数基の古墳がある。

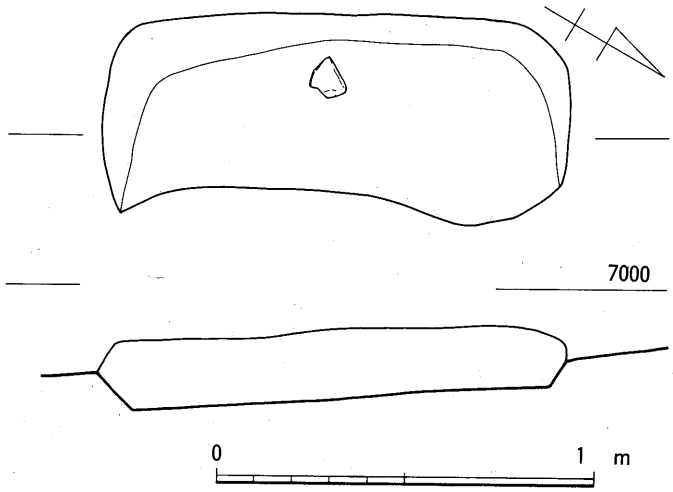
土壙は表土直下で、Ⅰ層に切り込まれて検出された。北東部は流失するが、全長は1.24mを測る方形プランの土壙である。埋土には須恵器片が流れ込む。



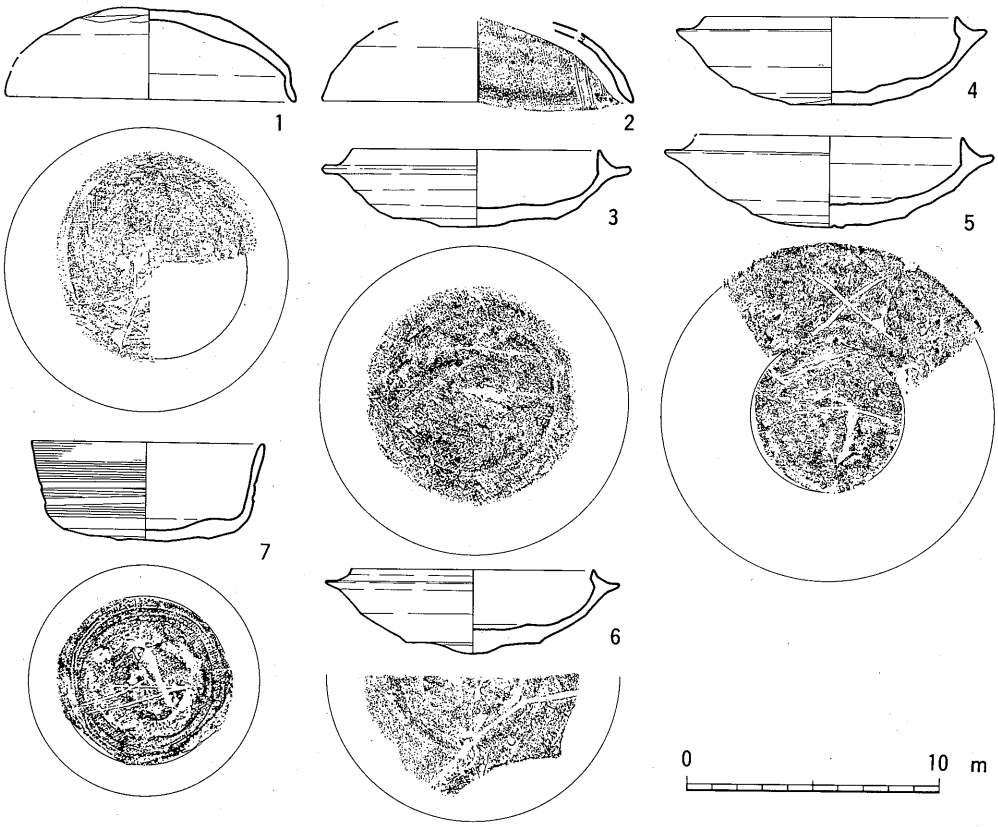
第２図　地形測量図（縮尺１/100）



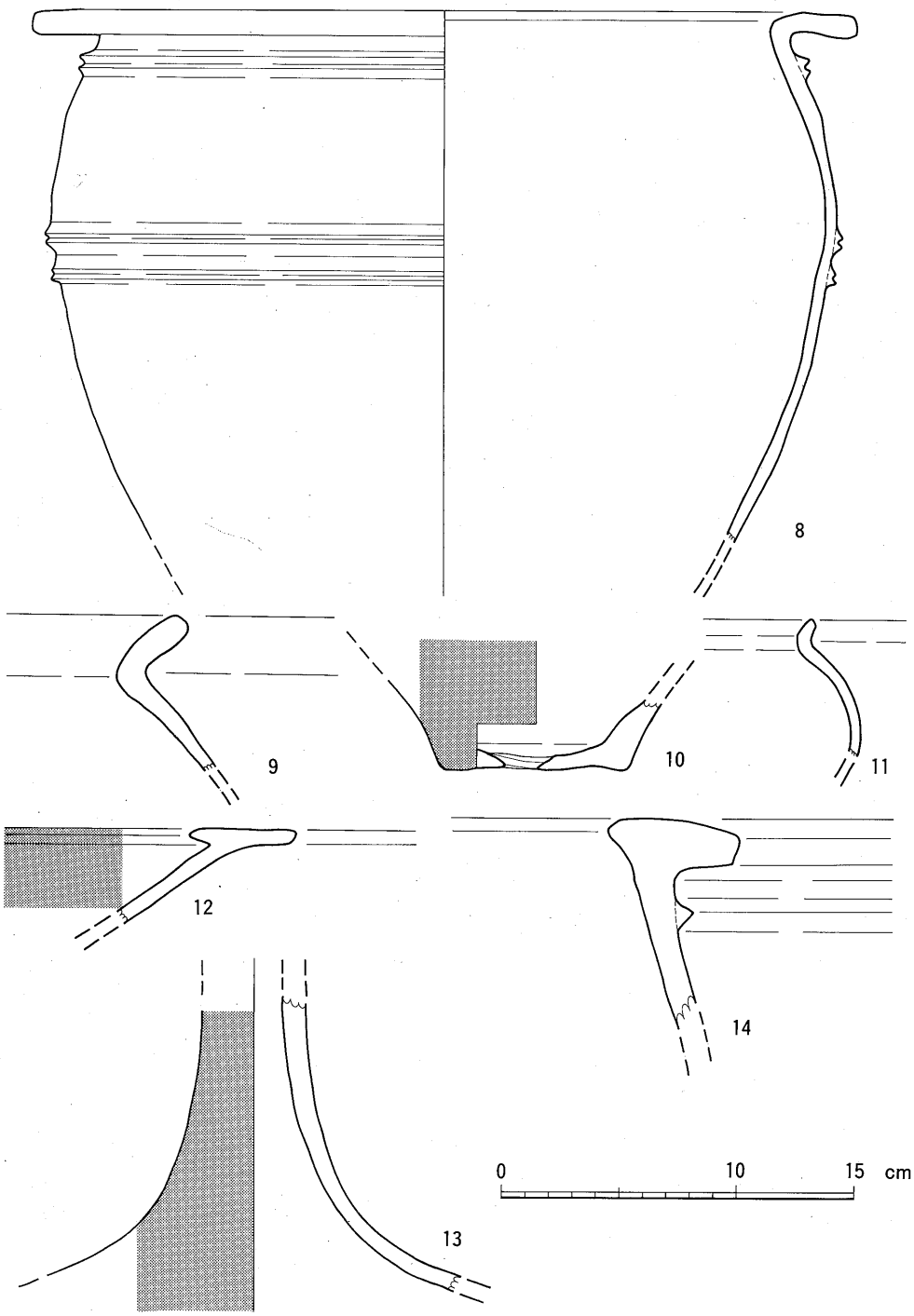
第３図　土層断面実測図（縮尺１/４）



第４図　土壙実測図（縮尺１/20）



第５図　出土遺物実測図（縮尺１/３）



第６図　出土遺物実測図（縮尺１／３）

遺物

1～8は古墳時代の須恵器で、表土から出土した。1・2は杯蓋である。1は静止ヘラ削りされる天井部から体部にかけて丸味をもって下り、口縁部との境で屈曲し、僅かに外反して立つ。口唇部は丸く収まる。2は口縁部の小片で、体部から口縁部にかけてゆるやかに移行し、口縁部はやや尖り気味に収まる。

3～6は杯蓋である。3は立ち上り高7mmを測る。立ち上がりは内傾し、受け部はやや上方に長目に引き出される。体部は丸味を帯び底部は回転ヘラ削りが施される。4は立ち上り高5mmを測る。立ち上りは厚く、内傾し、中ほどから上方に引き起こされる。受け部はほぼ水平に引き出される。体部から底部にかけて、ゆるやかな丸味をもち、底部は静止ヘラ削りされる。5は立ち上り高7mmを測る。立ち上りは内傾し、中ほどが屈曲して端部は上方に向く。受け部はやや上方へ引き出される。体部から底部にかけて浅いカーブを描き移行する。底部は回転ヘラ削りが施される。6は3～5に比べると小振りである。立ち上り高は5mmで、立ち上りは内傾し、中ほどから上方に引き起こされる。体部はゆるやかな丸味をもつが、底部はやや平担で回転ヘラ削りが施される。7は椀で、口縁部は僅かに外傾する。体部はカキ目が施され、その後2条の凹線をめぐらす。底部は回転ヘラ削りが施される。

8～14は弥生式土器である。いずれもⅠ層中から出土した。8は丹塗りの甕で、胴部下半は欠失する。口縁部は逆L字状を呈し、端部は僅かに下がる。口縁下に1条、胴部最大径位に2条の逆W凸帯がめぐる。9は「く」字状を呈す甕の口縁部小片である。10は甕の底部で、中央に穿孔を有す。11は短頸壺の小片で、口縁部は短く、やや外傾して立つ。12・13は高杯で、器面に丹が残る。12は鋤先状を呈す口縁部、13は筒部から裾部へ移る部分の破片である。14は甕棺の小片である。口縁部は短く、逆L字状を呈す。口縁下に一条の三角凸帯がめぐる。

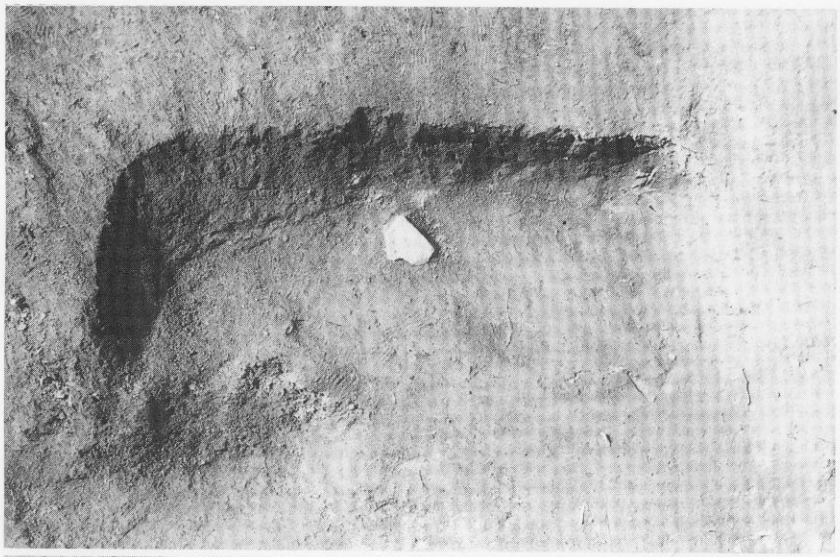
Ⅳまとめ

土壙は方形プランを呈すと思われるが、全容は流失のため明瞭でない。時期についても遺構に伴う遺物はないため明確にしがたい。しかし、土壙は弥生式土器のみを含む層（Ⅰ層）に切り込まれ、その上位からは須恵器を中心とした遺物が出土する事から、本土壙は古墳時代以降に作られたものである。

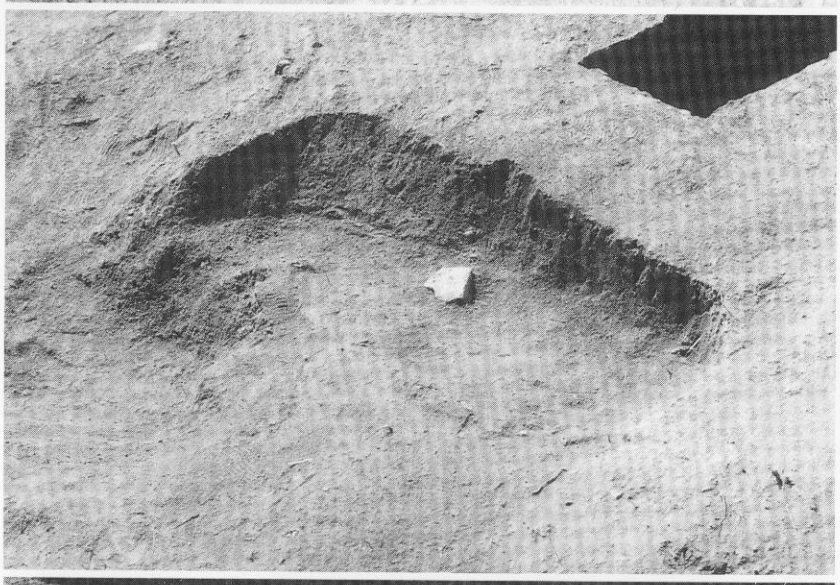
調査区全景（南から）

調査区全景（西から）

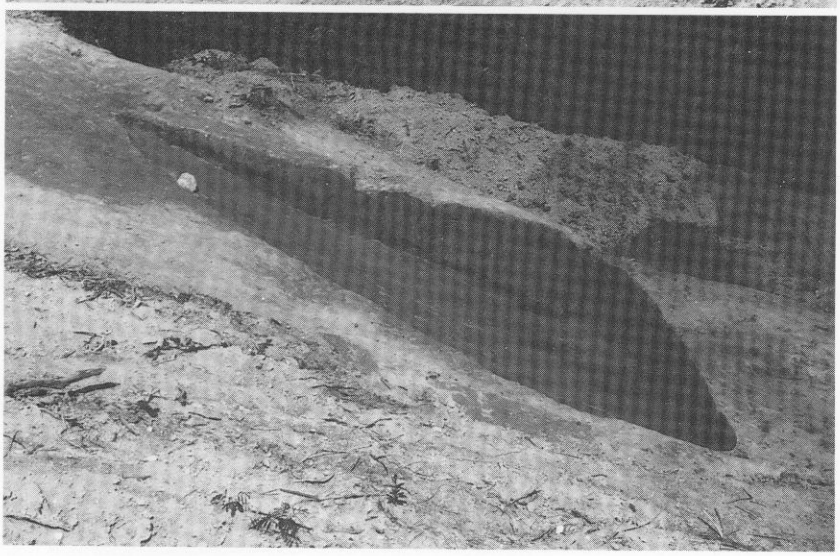
図版 2



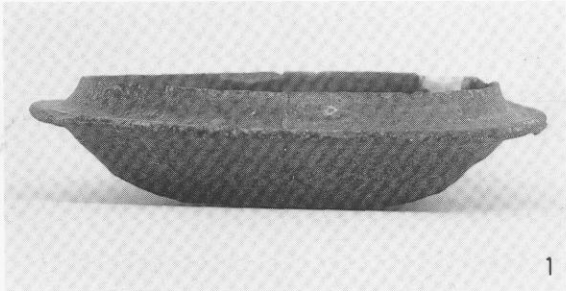
SD1



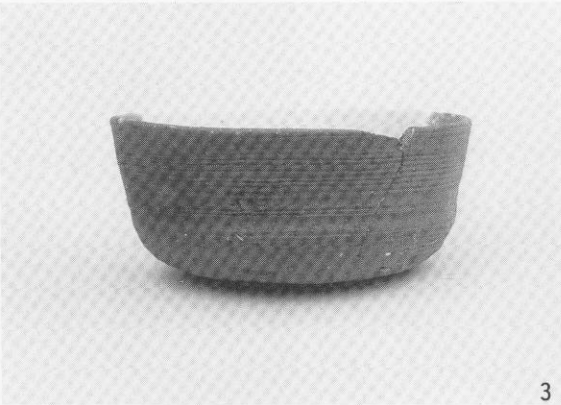
SD1

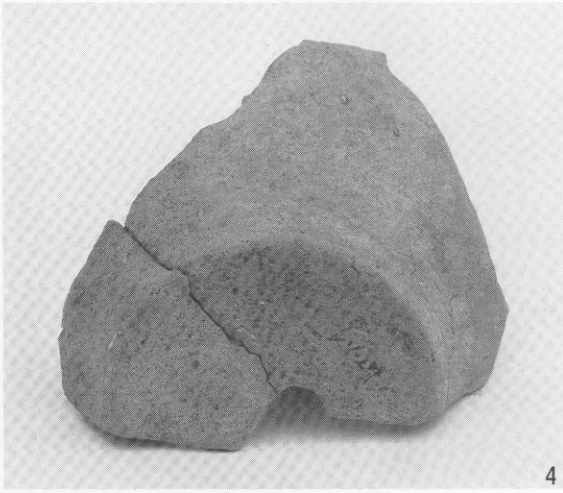


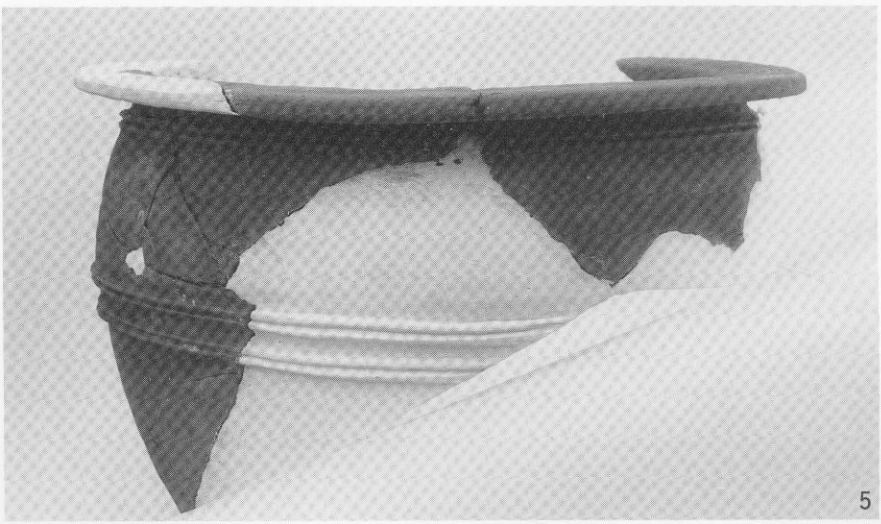
調査区断面


1

2


3


4


5

挿図対照番号

1 第2図 3
2 第5図 5
3 第2図 7
4 第6図 10
5 第6図 8